

日時：2020年9月27日（日） 13:00～14:30

場所：神岡町公民館

## 高原諏訪城を考える—縄張りから見た江馬氏館との関係—

講師：中井<sup>なかい</sup>均<sup>ひとし</sup>氏（滋賀県立大学教授）

### はじめに

ただいま紹介いただきました中井です。ご紹介にありました通り飛騨市と関わりが深く、毎回山城の発掘調査を見させていただいています。江馬館が発掘をしていたころも毎年、発掘現場を見に行っていました。今日は江馬館の委員として、江馬館に関わりある話で高原諏訪城を考えようと思います。江馬館といえば現在の整備された下館のイメージがあると思うんですけど、おそらく戦国時代は館だけで機能したのではなくて、背後の山城と連携してといいますか、私は戦国の二元的構造と呼んでいます。普段住むのは館、それから戦になって立て籠るのが山城という二つで一体化しており、それが戦国時代の城のあり方だろうと思っています。そういう意味では下館を考えるうえで高原諏訪城というものをもう少し分析しなければならないと思ってお話しさせていただきます。

### 江馬氏下館跡の発掘調査

飛騨市では江馬館の整備が進められているのと同時に、2、3年後に姉小路氏の城館も国史跡にされるということです。飛騨市の山城の発掘調査・分布調査は進んでいまして、年代や機能が明らかになりつつあります。そういう意味では、飛騨の山城は日本の戦国の城の研究に様々な成果を提供してくれていると思っています。もう一つ、下館の発掘調査というのは様々



な成果を提供しただけではなくて、日本の中世考古学の発展の礎になったといっても過言ではないだろうと思っています。それは実際に国史跡や国名勝になったことからもうかがえるわけです。

簡単に下館の内容を申しますと、足利将軍邸を模した構造をしています。織田信長に命じられて狩野永徳が描いた洛中洛外図屏風が最も有名ですが、これに足利将軍邸が描かれています。築地をめぐる中に主殿、会所、常御殿という建物群が描かれています。実は館の四分の一から三分の一に庭が描かれています。これは将軍邸だけではなく、管領の細川邸や松永弾正の屋敷でも規模は小さくなっていきますが、同じように主殿、会所、常御殿、そして庭園を持っています。全国の守護たちが京都の将軍邸に行った時に武家の棟梁たる将軍の屋敷はこうなんだということで自分たちの国々で同じような形を作っていくわけです。守護所は一町四方で作っていきます。ところが、ある地域では守護に準ずるランクの国人や戦国大名になっていくような人たちが、飛騨でいう江馬氏や三木氏も将軍邸を模していくわけです。江馬氏の館は実質的には守護所といってもいいような体裁を整えていたということになります。

大きな成果の一つに出土遺物の年代から館が機能していた年代をとらえることができたということがあります。調査以前は基本的には戦国時代の終わり、つまり江馬氏が滅ぶまで館は機能していたとみんな考えていたわけです。ところが、実際に発掘調査をすると 16 世紀前半には館の機能が停止したということが明らかになりました。これは地表面の観察ではうかがい知れなかったことです。資料の表 1 と図 2 をみると、下館は I 期から III 期に分類されていて、館の最盛期は II B 期(15 世紀末～16 世紀初め)と書いてあります。そこでどんな遺構が出ていたのかが図 2 に示されています。III 期(16 世紀中頃から末)になると、堀の外で溝が出る程度になってしまうわけです。これで下館の機能していた時代が分かったということになります。

### 高原諏訪城の縄張り(構造)と下館の関係

ところで、戦国時代の城館のあり方は詰(山城:防御空間)と館(山麓居館:居住空間)の二元的構造として理解されてきたわけです。その典型例が越前の戦国大名である朝倉氏の一乗谷です。資料の図 4 は一乗谷の地形図です。その左下に現在堀がめぐって整備をされている朝倉義景の館があります。ここは堀の幅を含めてようやく 80m ぐらいで方一町ありません。本館の右の山に目を移すと山城と書いている部分があります。千畳敷跡、本丸跡、一の丸、二の丸、三の丸跡と書かれている場所がありますが、これが山城の部分です。一乗谷も見事に館だけではなく、山城が構えられています。午前中は高原諏訪城に登りましたが、下館から歩いて 30 分ほどで登れます。一乗谷は本館から一時間ぐらいのところに山城を構えています。こういうふうに一乗谷も二元的構造なんです、どうも館ばかりに目が行ってしまい、山城との比較をされたことがなかったわけです。

そういう二元的構造で江馬館をみると、まさに江馬の下館は居館として構えられた館で、その

背後に詰として築かれた高原諏訪城という典型的な二元的構造を見て取ることができます。

ところで下館は 16 世紀前半に終わっていますが、高原諏訪城はいったいどうなのかということを考えていかなければなりません。まだ、高原諏訪城は発掘調査をしていないので出土遺物から年代を決めることは不可能なのですが、堀切や土塁、曲輪という構造の構成から年代を絞り込めないかと考えるわけです。図3をご覧ください。北から南の方に伸びてくる尾根、一番の鞍部に道路が通っています。そして、AとBの二本の堀切から豎堀になっていきますが、その二本の堀切によって尾根が完全に切断されています。そして、土塁を持つ曲輪を通り抜けると、Cの堀切があって、DとEという豎堀に守られている尾根をぐるっと回って、②の帯曲輪に取り付いてそこから登って、①の本丸に上がっていったということです。切岸が厳しいので、本日の現地見学ではいけなかったのですが、南の方を見ると、Hの堀切のさらに外側に曲輪があります。これが本来の城道です。今回はAとBの堀切のところに上がっていったわけですけど、これはお寺からお参りに行くための現在の道であって、当時は無いんだろうと思います。高原諏訪城に上がるのは④から矢印に従って⑤に入っていくというルートが想定されています。このようなつくりが高原諏訪城の特徴になります。

山城に行くのは 11 月から4月の間が一番いいと思います。ただし、飛騨は雪が積もるので、10 月末から 11 月下旬ぐらいか、早春の 4 月いっぱいくらいまでになります。そうすると、冬枯れによってもととの切岸の角度などがよく分かります。次に主郭の切岸と帯曲輪ですが、基本的に戦国時代の山城は土木施設ですから、土を切り盛りしてつくります。近世になるとこういうところが石垣になっていきます。土でそれを作り上げているというのが高原諏訪城の大きな魅力だと私は思います。次にHの堀切ですが、傾斜によってV字の堀切になっています。こういう土づくりのお城になっています。

標高 619m、比高差 160mで、今日登ってこられて景色を見られたと思うんですが、江馬氏が領有していた世界が見渡せるということが大事です。どのエリアまで見渡せるか、領民たちが見上げることができるのかが山城にとって大事です。ここでは比高差が 160mですから領有しているエリアがほぼ見えます。一乗谷が1時間かかるのはおそらく越前全体を見渡したいという朝倉氏の思いがあって、高いところに構えたと思います。守護戦国大名クラスになると山麓から小一時間くらいかかる山に城をつくるわけです。近江の観音寺城や浅井氏の小谷城なども山麓から小一時間くらいかかります。領有するエリアによっては少し高さに違いはあるかと思います。下館を眼下に望むことができ、その詰城であることは明らかです。そして堀切と切岸による防御施設です。一部に土塁を設けていますが、実は極めて単純なわけです。曲輪が直角に折れ曲がったりせずに直線的で、自然地形の尾根に合わせて三角形状にしか曲輪をつくられていないということです。

岐阜県の中世城館の総合調査における評価は「旧態依然とした中世城郭の思想から脱却できなかった」ということになっています。この点は高原諏訪城の年代を決めるうえでも大事な評価

なのかもしれません。飛騨の山城の特徴を私は巨大な堀切と高く急傾斜な切岸という、まさにダイナミックな土づくりの山城というふうに見ています。皆さん、やっぱり山城にいかれると土塁や堀切、虎口の形に目を向けられますが、山城の一番の評価は切岸であるとは私は思っています。いかに登らせないかということですね。いかに山を削って急斜面を作るかということです。かつて、これはあんまり評価されませんでした。どうしても曲輪という平坦地を見に行ったり、その周りにつくられた土塁を見たりします。切岸なんていうのはほとんど見向きもせずに登ってきたわけです。しかし、山城というはいかに登らせないかということが大事ですから、この切岸をつくるということが一番大事なんだろうと思っています。山城は土木施設です。決して、戦国時代のお城には天守は設けないわけですから、土木施設において最も大事なものは切岸であって、虎口や土塁の屈曲といったものだけで評価することは避けるべきだろうと思っています。そういうダイナミックな土づくりの城であるということが高原諏訪城の大きな特徴だろうと思っています。

今度はその年代をいつに求めるかということです。下館の年代について、発掘前は戦国時代の終わり、つまり江馬氏が三木氏に滅ぼされるまで存在したんだろうと思われていましたが、実はそうではなくて、発掘調査によって 16 世紀前半には江馬氏はどこかに行ってしまったということが分かりました。そうすると、高原諏訪城も館がなくなった段階で主人を失って廃城になったのかと考えないといけないわけです。もう一つ、お城にとって一番難しい点は残されている遺構が最盛期のものであるかということです。天正 10 年(1582)に江馬輝盛は三木自綱との戦いで討ち死をします。三木方の小島時光が高原諏訪城に攻め入ったという記録が残されています。つまり、下館は機能を停止してそこに江馬氏がいなくなったのに、山城の高原諏訪城は天正 10 年までは存在し続けていたということが文献史料から分かります。館と山城とで時代が違い、単純な二元構造では説明できないようです。詰と居館の二元論に矛盾が生じてしまうわけです。ところが一乗谷の朝倉館をみると、本館は義景の時代、つまり 16 世紀後半まで機能していたことが分かっています。

では山城の部分はどうかといわれますと、実は山城は今まで発掘調査をしていませんので年代が分からないんですね。ですが、私は一乗谷の山城についてはヒントを与えてくれていると思っています。一つは千畳敷や観音屋敷跡、宿直跡の土塁が方形に囲われているところを見てください。土塁によってほぼ方形に区画されています。それよりも南側に展開する一の丸、二の丸、三の丸はもともとの自然地形に合わせた曲輪の作り方がされています。どうも千畳敷や観音屋敷、宿直は自然地形をある程度無視して、人工的に四角い区画をつくっています。それは何かといいますと、今度は近江の小谷城を例にとってみたいと思います。

小谷城は山の上に大広間というところがあって発掘の結果、礎石建物が出てきました。しかも 3 万 7000 点もの陶磁器を中心とした遺物が出てきました。これは山の上で生活をしていたということが明らかです。私はお市や戦国の三姉妹といわれる茶々、初、江が上に住んでいたんだろうと思うんですが、普段の住まいが実は山の上に移っていたということが明らかになりました。では、

山の下に住んでいないのかというと、実は小谷城は山麓に御屋敷と呼ばれるところがあって、発掘調査でここから礎石建物が出てきています。下にも住む館があって、上にも住む建物が出てきているということです。それまでの戦国時代の二元的構造というのは下に住んで、上は戦いの場で住まないと先ほど言いました。ところが16世紀の後半ぐらいになってくると、戦国大名たちは山の上でも住む施設を作るようになります。それは単純に住まいが山の上に上がっただけでなく、麓にも住まいを残しています。どういうことかということ、おそらく、日常の住まいは上に移ります。戦争になって上に移動するのは大変なので、初めから安全を保障するために家族、女性や子どもは上に住んでいたのだろうとみてよいと思います。他の戦国大名たちの使者が来たり、京都から公家が来たりした時に山の上で接待をすることは無礼に当たるわけですから、將軍邸を模した山の麓の館で正式な対面をやっていたんだろうと思います。つまり、公的な空間としての麓とプライベートな空間としての山の上というのがどうも16世紀の後半ぐらいに誕生してきます。

もう一度考えますと、一乗谷では上の方に住むような方形区画の千畳敷や観音屋敷があるということは、どうも16世紀後半の山城の可能性が高いのではないかなと思っています。できれば、ここを発掘していただいて礎石建物が出てくることを願っていますが、山が陰しいということもあって、一乗谷では発掘はまだ行われていません。現在、山の上と下の両方が発掘されている状況は極めて少ないわけですが、小谷城はその典型的な事例になるだろうと思います。

信長の時代になっても同じで、信長はおそらく小牧山の上は家族が住むような空間があって、麓に信長の屋敷があったのだろうというふうに言われており、岐阜城ではそれは明らかです。山の上に住む場所があって、麓は信長居館といわれています。フロイスは『日本史』の中で、誰も登ることができなかった山の上に行ったら、信長の奥方とその子どもだけが彼に仕えていたと記しているわけで、まさに家族が上にいたことが書かれています。私はその後、信長が居城にした安土城も同じだと思っています。安土城は今、本丸とか天主に信長が住んでいたといわれていますが、山麓部分の秀吉邸といわれている場所は、信長の下屋敷だろうと考えています。上にも住まいがあり、下にも住まいがあるというのは戦国大名から信長時代までずっと続いているのではないかと考えています。

そういうパターンから考えると、高原諏訪城のあり方というのもひょっとすると、16世紀の前半に館が終わった、では、上をどう考えるかという時のヒントになるのではないかと思います。もう少し高原諏訪城に近い例を見ていきたいと思います。資料の8ページをご覧ください。長野県中野市に高梨氏という国人がおり、その館がありました。図5に高梨氏館とその背後に構えられた鴨ヶ嶽城の位置関係を示しています。そして、図6が鴨ヶ嶽城の縄張り図で、図7が高梨氏館の平面図になります。高梨氏館は大変面白くて、堀に囲まれた館が平面図にあります。その堀の周りに土塁がまわっています。この土塁をちよっと切って断面を見たら、土塁の中から築地塀が出てきました。なので、もともとは堀も土塁もない築地塀に囲まれた屋敷だったことが判明しています。それ

は足利将軍邸と同じ構造なんです。

土塁や堀に囲われるところに本来、守護とか有力国人は住まうべきではないんですね。彼らはきちんとした築地の中にいることが大事なんです。そんなこといっても戦国時代の後半になると、築地なんか敵が来たらすぐに壊されてしまうということで土塁や堀を構えるようになります。高梨氏の館はその経緯がよく分かるんですね。築地ではもう対応できないので、手っ取り早く埋めて土塁を作ったわけです。それが実は15世紀の後半から16世紀の前半です。高梨氏も16世紀の後半にはここからいなくなります。江馬氏の下館と同じような歴史を高梨氏も辿っています。そして、鴨ヶ嶽をみますと、堀切をいくつも重ねて、どちらかというと小さな曲輪だけを持つような構造になっています。堀切のダイナミックさや切岸のすごさからこの鴨ヶ嶽城というのはやはり16世紀後半の城だと考えられます。下の館は16世紀の前半に終わりますが、山城だけは16世紀の後半まで続いていたということですね。まさにこれは高原諏訪城と同じような矛盾を抱えています。詰の山城と居館でなぜそういうような時代的なずれが生じるのか、おそらくこうした事例は日本列島の中で今後も増える可能性があります。一方では両方が16世紀の後半で終わっているが、一方では館が16世紀の前半に終わってしまうということなんですね。そこで今度は二元的構造の城館から一元的構造の城郭へというところをお話いたします。

## 二元的構造から一元的構造の城郭へ

ずれが生じるのは戦国期後半に本拠を移動した可能性があるということです。江馬氏は1500年の頭から滅ぼされる天正10年までの間、一体どこにいたのかということが一番の課題になります。私は江馬氏の本拠は東町城に移ったのではないかと考えています。図8・9をご覧ください。現在の東町城跡には石垣をめぐらせた堀の跡が残されています。現在の石垣はかなり新しいものですが、ひよっとすると石材は戦国時代のものをそのまま使っているかもしれません。

『飛州志』に収録されている東町城の古図には石垣が描かれています。現在、模擬天守が立っているところは、江戸時代には石垣があって、象徴的なものが建っていた場所である可能性が高いようです。私はこの東町城に江馬氏は移ったと考えています。地域によって様々ですが、二元的構造、つまり方形館と山城では対処できない時代に突入し、居館と詰城を一体化させていきます。ともに、自然地形による防御ではなく、人工的に直線的な塁線をもって石垣によって築かれた城に変わっていったのではないかと考えています。従来の飛騨の山城のダイナミックな堀切と切岸によって代表される土づくりの飛騨の城とは全く異質な城郭が出現したのではないかと思います。それは江馬氏自らによって、織豊系城郭として築いた城というふうにいえるのかもしれませんが。

織豊系城郭とは織田信長、豊臣秀吉によってつくられていく極めて政治性の強い、類似性のある城づくりです。これは信長とその家臣団、秀吉とその家臣団に貫徹されていく城づくりになります。

す。代表的なのはまず4mを超えるような高石垣を築くということです。それから瓦を葺きます。そして、礎石建物を建てます。そのメインは天守と呼んでもいいかもしれません。この三つを城の中に導入していくわけです。それまでの切岸だけの土づくりの城が石垣になり、掘立柱の建物が礎石になり、板葺きの建物が瓦葺きに変化していきます。こういったものを信長や秀吉は自分の家臣たちにも貫徹させていきます。江馬氏は江馬氏で、時代がそういう時代になったので、自らそれに近いような城づくりをしていくのではないかと思います。

そのヒントは青森県の弘前にある堀越城にあります。土塁づくりのお城で、本丸で発掘調査されましたが、瓦は一枚も出ませんでした。しかし、巨大な礎石建物や櫓門になるような門が出ています。建てた津軽為信は南部氏から独立するために天正18年、秀吉が小田原に攻めていった時に三枚橋城というところで秀吉に対面をします。翌年には奥方を伴って上洛をして、それまでの東北の城とは全く違う聚楽第を見ている。しかし、残念ながら東北ではまだ石垣を作る職人や瓦を葺く職人がおらず、瓦については気候の関係から葺けなかったかもしれません。そこで作事という建物を採用します。巨大な礎石の建物で本丸の二分の一を占有します。それまでの東北の掘立柱の巨大な建物と全く違うわけです。それから巨大な櫓門をつくります。これはその後の弘前城も同じようなものをつくっています。東北において石垣・瓦・礎石建物の三つは全てそろいませんが、それに極力近づけたいという思いが堀越城で見られます。

同じように江馬氏も時代から詰と居館というものを一体化させた方形区画に一元化していきます。戦いも住むのもここになるわけです。おそらく16世紀中頃、江馬氏はこちらに移っていたのではないかと思います。それは織田・豊臣の城に近づけたいという思いがあったのだらうと思います。ただし、残念ながらこの『飛州志』に描かれているのは江戸時代の東町城跡です。お城というのは落城後も使われる可能性は非常に高いわけです。これだけの石垣の城が果たして江馬氏の段階のものかといわれるとどうも違うんじゃないかと思います。これはその後、江馬氏を滅ぼした三木氏によって改修された可能性もあるし、天正13年に金森長近が飛騨に入ってきたときにおそらく東町城を使ったのだらうとみてよいと思います。ですから残念ながら、『飛州志』に描かれている状況が江馬氏の段階のものではないだらうというふうに思っただければいいかと思います。しかし、私は下館が廃絶した後、江馬氏はこちらに行ったのではないかなと思っています。

そして、それは江馬氏の先進性として評価できるのではないかと思います。例えば、越前の朝倉氏はその時代の対処ができずに最後まで二元的構造を維持しました。あるいは浅井氏の小谷城も同じです。最後まで二元的構造を維持したことによって、時代に対応できなかったということです。甲斐の武田氏は最後にやるわけですね。武田氏は信玄の父親の時代から現在の甲府に館を設けて、その背後に要害山城をつくっています。つまり、二元的構造を維持しています。しかし、勝頼の時代になり信長との抗争が生じると、二元構造では維持できないということで新府城に移ります。新府城で四

角い広大な城づくりをしています。防御と居住区間を一体化させました。府中の館と要害山城の二つを一つにしたわけです。しかも、新府は新しい府ですから、勝頼の新たな試みでもあったわけです。しかし、この対処もすでに時期遅しということで最後はそこも滅ぼされてしまいます。江馬氏の場合もそういう二元的構造の城館から一元的構造の城館ということで理解をしたいところです。

そうなれば下館が廃絶した後、高原諏訪城はどうなったのかということで、今度はいくつかの可能性を考えてみたいと思います。まず一つ目として、下館は東町城へ移りますが、高原諏訪城はそのまま維持管理されたという可能性です。では、なぜ館が無くなったのに山城だけ維持管理する必要があるのかを考えなければなりません。

二つ目は下館移転とともに高原諏訪城も廃絶した可能性です。この場合は構造的に矛盾はないのか、つまり高原諏訪城の方が発達し、16世紀後半まで使ったんじゃないかという構造的矛盾を考えなければなりません。あと、天正10年の高原諏訪城の落城をどう考えるかということです。その高原諏訪城はどこなのかということを考えないといけません。

三つ目は下館移転後に廃絶するんですが、16世紀後半の三木氏との軍事的緊張の中で再び用いられることになったということです。つまり、館は移転して高原諏訪城も一旦廃絶しましたが、その約50年後、隣接する三木氏との抗争の中で館は再利用せず、山城だけはもう一度用いたのではないかというふうに考えられます。この段階でもう構造的に矛盾はないのか、16世紀後半につくり直したのかということを経緯から分析しないといけません。

この三つの可能性のなかでも、私は一つ目の下館は移転したが、高原諏訪城はそのまま維持管理された可能性が一番高いと思っています。では、その必然性は何かということです。私は江馬氏の父祖伝来の地が高原諏訪城のある場所であるため、山城だけは残したのではないかと考えています。普段住む、あるいはその住まいは軍事的にも使えるという一元的構造で江馬氏は16世紀の半ば以降、神岡の方に出て東町城を居城とします。一方で軍事的な価値は低くなってしまうんですが、父祖伝来の地である高原諏訪城を維持管理し続けたのではないかとみています。

その類似例として安芸の戦国大名である毛利氏の事例があります。毛利氏は郡山城を居城にしていました。天正19年に毛利元就が郡山城から広島城に移ります。以後、毛利氏の居城は広島城になります。かつてはその段階で郡山城は廃城になったと考えられていましたが、実際はその後郡山城は維持管理されていました。少なくとも慶長5年の関ヶ原の合戦までは毛利氏が城として維持管理しています。それは広島へ出た後も、一番勢力を拡大した元就の城であるという、毛利家にとっては聖地に近いわけで、その維持管理は非常に大事なことであったわけです。基本的に守護大名は本拠を移動しないんですが、軍事的な状況で広島に移らざるをえませんでした。しかし、郡山城も残しておきたいということで毛利氏は郡山城を維持管理してきました。

土佐の長宗我部氏の場合は、天正19年に岡豊城から浦戸城へ本拠が移ります。この段階で岡豊城は廃城になったと思われていますが、ここは長宗我部氏が代々居城とした場所で浦戸城



へ移った後も維持管理され、少なくとも慶長 5 年の関ヶ原の合戦までは使われていたようです。郡山城や岡豊城は軍事的機能は低下し、そこでの戦いは考えていません。しかし、父祖伝来の地であるために残したんだろうと思っています。江馬氏に置き換えてみると、時代に対応して江馬氏は下館から神岡の東町城に移ります。一方で江馬館の背後にあった高原諏訪城は父祖伝来の地として維持管理をしていたのではないかなと思っています。

三木氏との戦いである八日町合戦での敗北はアクシデントで、江馬氏にとってまさか負けるとは思っていなかったわけです。その結果、高原郷へ三木勢が侵攻してきたため、高原諏訪城で戦わざるを得ませんでした。決して、戦いのために残していたわけではなく、父祖伝来の地として聖地化して維持管理していただけだったんですが、八日町合戦のアクシデントによって高原諏訪城で戦わなければならなくなってしまう、天正 10 年に高原諏訪城が再び表舞台に出てきたのではないかと考えています。あるいは、三木勢が侵入してきたときに最後は父祖伝来の地に立て籠って戦おうと思ったのかもしれませんが。天正 10 年の落城後も一時、江馬時政が居城としていたという記録もありますが、先祖の故地を再利用したのではないかとみられます。最終的には金森氏が入ってきて完全に廃城になったということです。

高原諏訪城は維持管理をされてきましたが、その縄張りは一体いつのものなのかについても考えていきます。私は江馬氏の下館の最盛期の 15 世紀後半から 16 世紀前半につくられたとみてよいと思っています。かつてはあのダイナミックな堀切や切岸は 16 世紀後半と評価をされていました。つまり、16 世紀の前半ではできすぎだと思っていましたが、果たしてそうなのでしょう。飛騨の城を見ていく中で、16 世紀後半によく使うテクニックで畝状堅堀群というものがあります。連続して堅堀を掘っていくものですが、これが高原諏訪城では認められません。畝状堅堀群自体も本当に 16 世紀後半のものであるかどうかはわからないのですが、少なくともそれが 16 世紀後半の飛騨の城では認められます。それが高原諏訪城にないということはやはりそれよりも前で、今の構造は 16 世紀前半くらいのもので評価してよいのではないかと思います。堀切や切岸は非常に発達していますが、これも 15 世紀後半から 16 世紀前半の発達した縄張りとして評価すべきだろうと私は思っています。あえてそれを 16 世紀後半だという必要はないと思います。見事なダイナミックさが実は 15 世紀後半には飛騨にはあると思いたいところです。

もう一つ、高原諏訪城の年代を決めるために飛騨の別の山城である小鷹利城を分析してみたいと思います。小鷹利城も詰城ですから山の上には住まないと思っていました。ところが発掘をすると巨大な曲屋になるような礎石建物が出てきました。まず、山の頂部でこのような礎石建物が出てきたことも驚きですが、最も驚かされたのは、礎石建物に伴って出土した土器です。これが 15 世紀後半から 16 世紀前半のものばかりで、16 世紀後半のものが一切含まれないんですね。こんな巨大な建物が 16 世紀前半に小鷹利城で存在していたわけです。

16 世紀後半になると戦国大名たちが山の上に礎石建物を持つようになるといういましたけれど

も、飛騨ではそれより半世紀ほど古い、16 世紀の前半頃に山の上に礎石建物を持つということが小鷹利城で明らかになったわけです。今までの山城の常識では考えられないですが、実際にこれは出てきましたので、実態を直視しなければなりません。となると、ダイナミックにつくられた堀切や切岸が 16 世紀後半と果たしていえるのでしょうか。16 世紀前半であつてもなんらおかしくないわけですが。さらに高原諏訪城の場合は資料の図3をみると、基本的には堀切や竪堀でもって、城の防御線を確保しています。主郭と帯曲輪はありますが、ほとんど土塁をまわしていません。主郭は土塁をまわさないというような構造になっており、シンプルで単純です。尾根先を掘り切っただけで、中心部分に主郭と帯曲輪をまわしただけになります。

縄張りという構造からみると、ダイナミックな堀切を使っているから 16 世紀後半だとは決して言い切れません。シンプルな縄張りからすると土木量がすごいですが、私は 16 世紀前半で十分つくれる城ではないかと思っています。まさに 16 世紀前半の城づくりがそのような堀切や切岸を使っていたということを示しているのではないかなと思っています。図 3 で堀切 H よりも南側にある曲輪と北側でちょっと顔つきが違います。

H より北側では、切岸はすごいんですが、曲輪は山頂をカットしているだけ、その一段下に帯曲輪を一段まわしているだけなんです。ところが、H よりも南の方では曲輪を何段にも重ねて、④からいくと道を屈曲させて、⑤に入ります。ちょうど屈曲した矢印のところの左側に石垣があります。石垣が飛騨で出現するのは 16 世紀後半を待たないといけませんので、高原諏訪城は北側と南側では顔つきが違ふようです。それは時期差といってもいいのかもしれませんが。南側は登城道を直進させない、あるいは石垣を設けているといった点から 16 世紀後半に改修があったと考えてよいのではないかと思います。高原諏訪城の構造の中に、16 世紀前半までにつくられた城と最後の 16 世紀後半に改修されたところが部分的に⑤のあたりで認められるんだと思います。基本的に 16 世紀前半につくられた城とみていいだろうと思います。

次に図4をご覧ください。江馬館を理解するためには、下館だけ、あるいは高原諏訪城だけでは理解できません。周辺には多くの城跡が分布しています。これらが連動することによって江馬氏の領域内が守られるわけですね。図の高原諏訪城の 2 と書かれた上の部分に道路が走っていますけれど、この道路よりも北側の尾根に点々と堀切や曲輪が認められます。これらは近年発見されました。その北方の尾根に点在する削平地や堀切は統一性を欠く構造です。ただ尾根に堀を切ったり、頂部を削平したりだけということですね。統一性を欠くということは、初めから計画性をもってつくったわけではなく、臨時的なものだろうと思っています。

臨時的につくるということは、戦いを目前にして高原諏訪城だけでは維持管理できなかったのだろうと思います。さらに、北方を警備したいということでつくったのではないのでしょうか。北方の尾根に点在する山城の施設、これは天正 10 年、もしくはそれ以後の軍事的緊張に対処するために増築されたのではないかと思います。高原諏訪城の最後の部分が実は北側の尾根にある可

能性が考えられます。もう一つの可能性は下館を守るために背後に点々と16世紀の前半につくったということも考えられるかもしれません。私は極めて臨時的なつくりから、16世紀後半に三木氏らに対処するためにつくられたんじゃないかとみています。

#### おわりに

まとめますと、まず一番の疑問は下館と高原諏訪城の年代が合わないということです。下館が16世紀前半に廃絶した後、江馬氏はどこに行ったのかということですね。一つの可能性として神岡の東町城に行ったということで、江馬氏の先進性として評価できるのではないかと思います。館と詰城をやめて一元化を行います。しかし、この東町城もその後三木氏や金森氏によって改修されてしまったので、今は残念ながら江馬氏の構造をみることはできません。では、高原諏訪城はどうなのでしょう。16世紀前半、江馬氏が東町城に行った後も維持管理がされていたと思っています。その理由は江馬氏にとっての聖地であるからです。そのために父祖伝来の地を残しておきたいという思いから、城としての維持管理をしていたのではないのでしょうか。もちろん城ですから、戦争になったらそれを使います。それは天正10年に三木氏が高原郷に入ってきたときに高原諏訪城を最後に使ったというところから分かるのではないかと思います。

最後に今、飛騨の山城が熱いと書かせていただきましたけど、この後、仁木先生の講演もあります。私は江馬館の委員としての立場で本日お話をさせていただきましたし、仁木先生は姉小路氏の委員としての立場でお話をされると思いますが、飛騨市は江馬氏と姉小路氏のダブルヘッダーの山城を解き明かそうとされているわけであります。江馬館はすでに国の史跡になっています。担当の方と話していましたが、昭和50年代に江馬氏城館跡“群”として史跡指定されていることは極めて珍しいというか、普通は単一の史跡〇〇城跡なんですよ。それが館だけでなく山城5つぐらいを一緒に指定しています。そういう群指定はどっちかというと今が流行りなわけですよ。去年は長野県松本市で小笠原氏城館群が国の史跡になりました。今、群指定しているのを江馬ではすでに昭和50年代にやっていました。そして数年後、姉小路氏の城跡がいくつか群で国の史跡になりますね。単体でいえば、飛騨市の中で10か所ぐらいの山城が国指定になるということで、まさに飛騨の山城が熱いんですよ。さらにそのために今、様々な調査をされています。決して発掘調査だけではなく、当時の地割を明治の地籍図などで分析をされています。そのような調査も含めて、飛騨の山城では点々と調査が始まっています。もちろん、これらは国指定になるだけではなくて、日本列島の中世の城や館を考えるうえでの大きな指標になります。それらをふまえて、将来的には山城のまち、飛騨市になることを夢みております。非常にややこしい話で申し訳なかったのですが、縄張り、あるいは高原諏訪城の位置についてちょっと考えてみました。本日の話の内容を立証するために、高原諏訪城でも山頂部分で今後発掘が行われて、どんな建物があつたのか、出土遺物からいつの時代になるのかということに迫ることができるとうれしいです。

ということで大変雑駁な話になりましたが、時間になりましたので、私の話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

飛驒の城跡へ行こう！2020

2020/09/27

## 高原諏訪城を考える ―縄張りから見た江馬氏館との関係―

中井 均(滋賀県立大学)

## ◆はじめに

- ・ 解明が進む飛驒の山城 ⇒ 近年の飛驒市による発掘調査や分布調査【山城の機能していた時代を正確に捉えることが出来つつある】

## ◆江馬氏下館跡の発掘調査

- ・ 江馬氏下館跡の発掘調査 ⇒ 京都の將軍邸を模した構造であることが判明【方形の屋敷区画のなかに主殿、会所、庭園、常御殿が配置される構造】  
飛驒の実質的な守護所としての体裁を整える  
※日本の中世考古学発展の礎となる【国指定史跡(さらに庭園は国指定名勝)】
- ・ 大きな成果のひとつ ⇒ 出土遺物の年代より館が機能していた時代を捉えることができた【最盛期は15後半―16前半】  
※実は戦国時代後半には館としての機能は停止していたことが判明

## ◆高原諏訪城の縄張り(構造)と下館の関係

- ・ 戦国時代の城館のあり方 ⇒ 詰(山城:防御空間)と館(山麓居館:居住空間)という二元的構造として理解されてきた【その典型例が越前の戦国大名である朝倉氏の一乗谷】
- ・ 江馬氏下館 ⇒ 居館として構えられた館(下館)とその背後に詰として築かれた高原諏訪城【典型的な二元的構造】
- ・ 高原諏訪城の構造 ⇒ 標高 619m(比高約 160m)の尾根先端部の頂部に構えられる【江馬氏下館を眼下に望むことができ、その詰城であることは明らか】  
堀切と切岸による防御施設(一部に土塁を設ける) ⇒ 極めて単純【「旧態依然とした中世城郭の思想から脱却できなかった」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』の評価】  
飛驒の山城の特徴 ⇒ 巨大な堀切と高く急傾斜の切岸【ダイナミックな土造りの城郭:山城で最も重要な施設は堀切と切岸！】  
※山城は土木施設であることを見事に示す構造として再評価すべき【虎口や土塁の折だけでは評価できない】
- ・ 現存する高原諏訪城の遺構の構築年代を考える ⇒ 残されている遺構は最後の年代を示しているに過ぎない  
天正 10 年(1582)に江馬輝盛は三木自綱との戦い[八日町合戦]で討死 ⇒ 三木方の小島時光が高原諏訪城に攻め入る【「諏訪城無相違則(乗取)之」寿楽寺『大般若経後書』】  
つまり 16 世紀後半に山城として機能していたことは明らか

- ・ところが下館跡はすでに 16 世紀前半には廃絶している ⇒ 下館と詰としての高原諏訪城は 16 世紀中～後半には二元的構造とはならない

※矛盾が生じる詰と居館の二元論

越前一乗谷朝倉氏 ⇒ 居館(16c 後半)と山城(16c 後半)【二元的構造】

越後高梨氏 ⇒ 居館(16c 前半)と詰城と考えられる鴨ヶ嶽城(16c 後半か)【二元的構造となくなる】

※高原諏訪城と江馬下館も高梨氏館と同じ矛盾を抱える【こうした詰と居館で時期的ズレの生じる山城と居館は今後も増える可能性は大】

#### ◆二元的構造の城館から一元的構造の城郭へ

- ・ズレが生じるのは戦国期後半に本拠を移転した結果 ⇒ 東町城の築城【丘陵先端部に石垣を築いて方形タイプで、内郭と外郭から構成される】

方形館と山城では対処できない時代

居館と詰城を一体化させるとともに自然地形による防御ではなく、人工的に直線的な墨線を持ち、石垣によって築かれた城 ⇒ 従来の飛騨の山城とはまったく異質な城郭の出現【江馬氏自らによって織豊系城郭として築いた城】

- ・江馬氏の先進性として評価 ⇒ 越前朝倉氏はその時代の対処が出来ず最後まで二元的構造を維持、江北の浅井氏の小谷城も同じ【甲斐の武田氏は最後に甲斐府中(躰躰ヶ崎館)と要害山城という二元的構造から新府城へ(しかしすでに遅かった)】
- ・下館は廃絶したが高原諏訪城はそのまま機能していたのか ⇒ いくつかの可能性
  - ①下館移転後も高原諏訪城はそのまま維持管理されていた(その必要性は?)
  - ②下館移転とともに高原諏訪城も廃絶した(構造的に矛盾はないのか?、天正 10 年の落城をどう考えるのか)
  - ③下館移転に伴い廃絶したが、16 世紀後半の三木氏との軍事的緊張のなかで再び用いられることとなった(構造的に矛盾はないのか?)
- ・東町城への一元化は江馬氏の近世化(織豊化)を示すものとして評価 ⇒ そうであれば高原諏訪城も一旦は廃城となった可能性が高いが、父祖伝来の居城は聖地でもあり軍事機能とは別に維持管理された【可能性としては①が最も高いと考える】

※安芸の毛利氏の場合 ⇒ 郡山城から広島城へ居城を移すが郡山城は維持管理された

土佐の長宗我部氏の場合 ⇒ 岡豊城から浦戸城へ居城を移すが岡豊城は維持管理された

- ・三木氏との戦い[八日町合戦]での敗北はアクシデントであり、高原郷への三木勢の侵攻に対応した結果(あるいは父祖伝来の故地に最後は立て籠もったのかも知れない)

※天正 10 年の落城後も一族の江馬時政が居城としているがこれも先祖の故地の再利用と見られる

◆おわりに

- ・縄張りはいつのものか ⇒ 江馬氏下館の最盛期に築かれた【15 世紀後半-16 世紀前半】確かに虎口や折は認められず稚拙な構造なのかも知れないが、堀切や切岸は非常に発達しており、15 世紀後半から 16 世紀前半の発達した縄張りを示す山城として評価すべき
- ・近年の飛騨市における山城調査 ⇒ 小鷹利城では 15 世紀後半-16 世紀前半の礎石建物が山頂部から確認された【山上居住を示すとともに 15 世紀後半-16 世紀前半の山城構造が明らかとなった】
- ・高原諏訪城の北方尾根に点在する削平地(曲輪)や堀切の存在が明らかにされた ⇒ 統一性を欠く構造【極めて臨時的】  
あるいは天正 10 年もしくはそれ以後の軍事的緊張に対処するための増築か?
- ・飛騨の山城が熱い！  
国指定史跡江馬氏城館跡群、さらには姉小路氏城館跡群の国史跡への指定 ⇒ 国指定史跡として今後は大いに活用されることに期待したい【山城のまち飛騨市へ】





図1 越前一乗谷朝倉氏遺跡地図

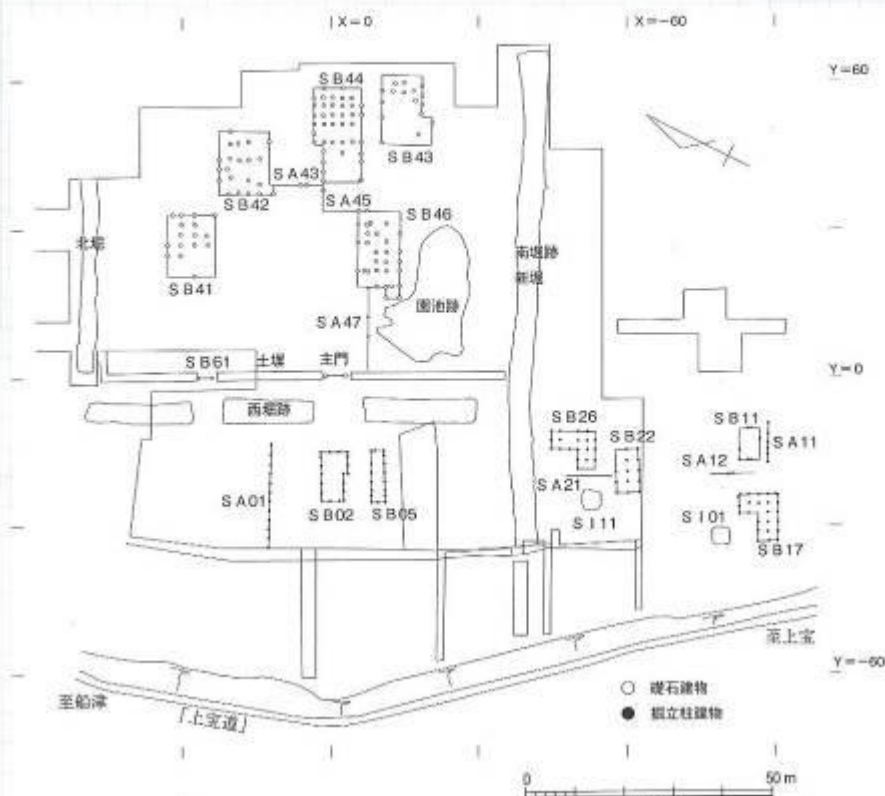


図2 江戸氏下館跡ⅡB期の遺構配置図

| 時期                         | 遺構                                                                                                         |
|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 江戸氏下館Ⅰ期<br>(13世紀後半～14世紀代)  | この地の利用が始まった時期                                                                                              |
| 堀内地区<br>堀外地区               | SB 48<br>SB 01・06・07・14・21                                                                                 |
| 江戸氏下館ⅡA期<br>(14世紀末～15世紀後半) | 館として整備した時期                                                                                                 |
| 堀内地区<br>堀外地区               | SB 49・53・60・61・62・64、SV 02、南堀旧堀・西堀新堀、園池<br>SB 03・13・15・28、SA 02・13・26・27・32・55、SI 02                       |
| 江戸氏下館ⅡB期<br>(15世紀末～16世紀初め) | 館として整備し、建て替えられた時期                                                                                          |
| 堀内地区<br>堀外地区               | SB 41・42・43・44・46・61、SA 43・45・47・55・56、SV 01、南堀新堀、西堀、北堀、主門、園池<br>SB 02・05・11・17・22・26、SA 01・11・12、SI 01・11 |
| 下館Ⅲ期<br>(16世紀中頃～末)         | 館として利用しなくなった時期                                                                                             |
| 堀外地区                       | SI 21、SD 22                                                                                                |

表1 江戸氏下館跡遺構変遷表





圖3 高原諏訪城跡略測圖(佐伯哲也氏作圖)



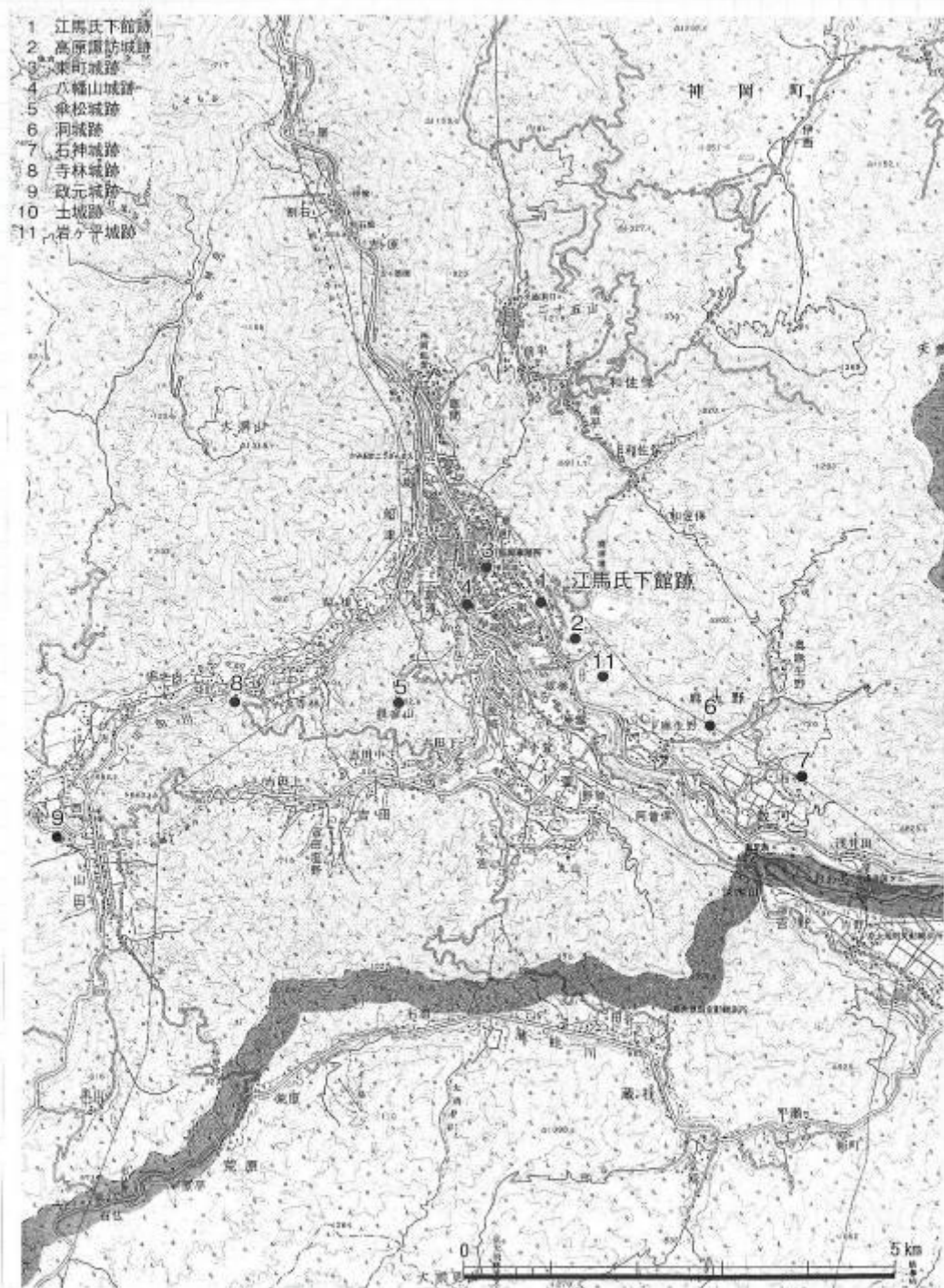


図4 江馬氏下館跡周辺の城跡分布図



図5 高梨氏館跡位置図

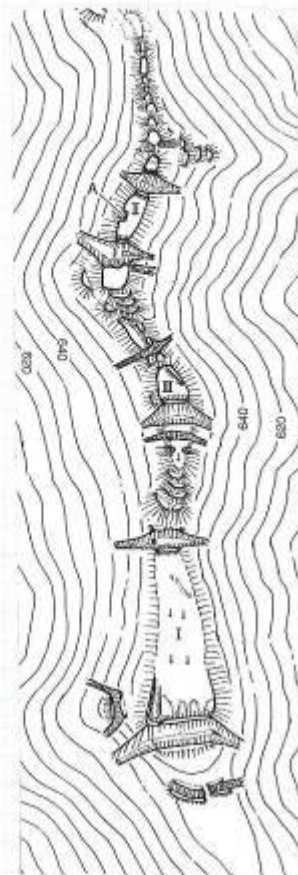


図6 鴨ヶ嶽城跡概要図(遠藤公洋氏作図)

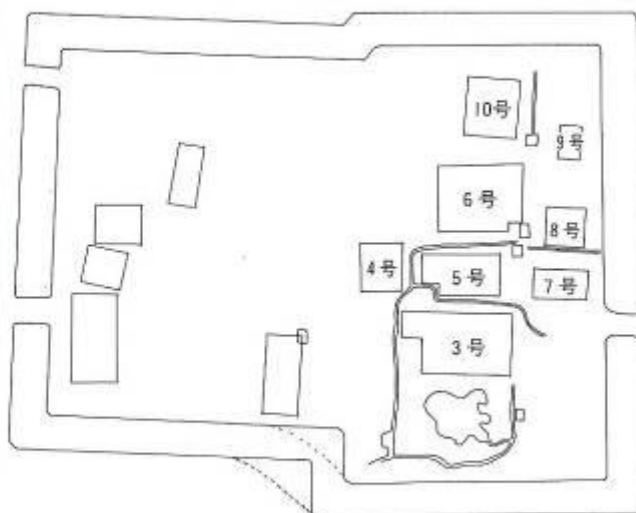


図7 高梨氏館跡平面図





図8 東町城跡概要図(佐伯哲也氏作図)

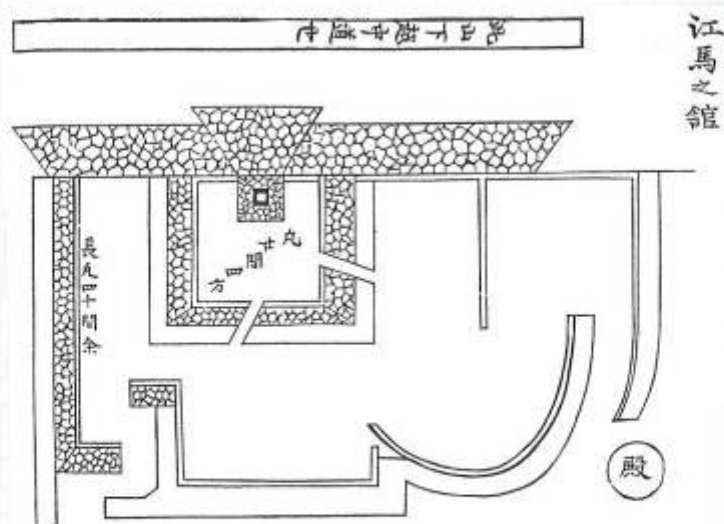


図9 東町城古図(『飛州志』所収)